

特258

738

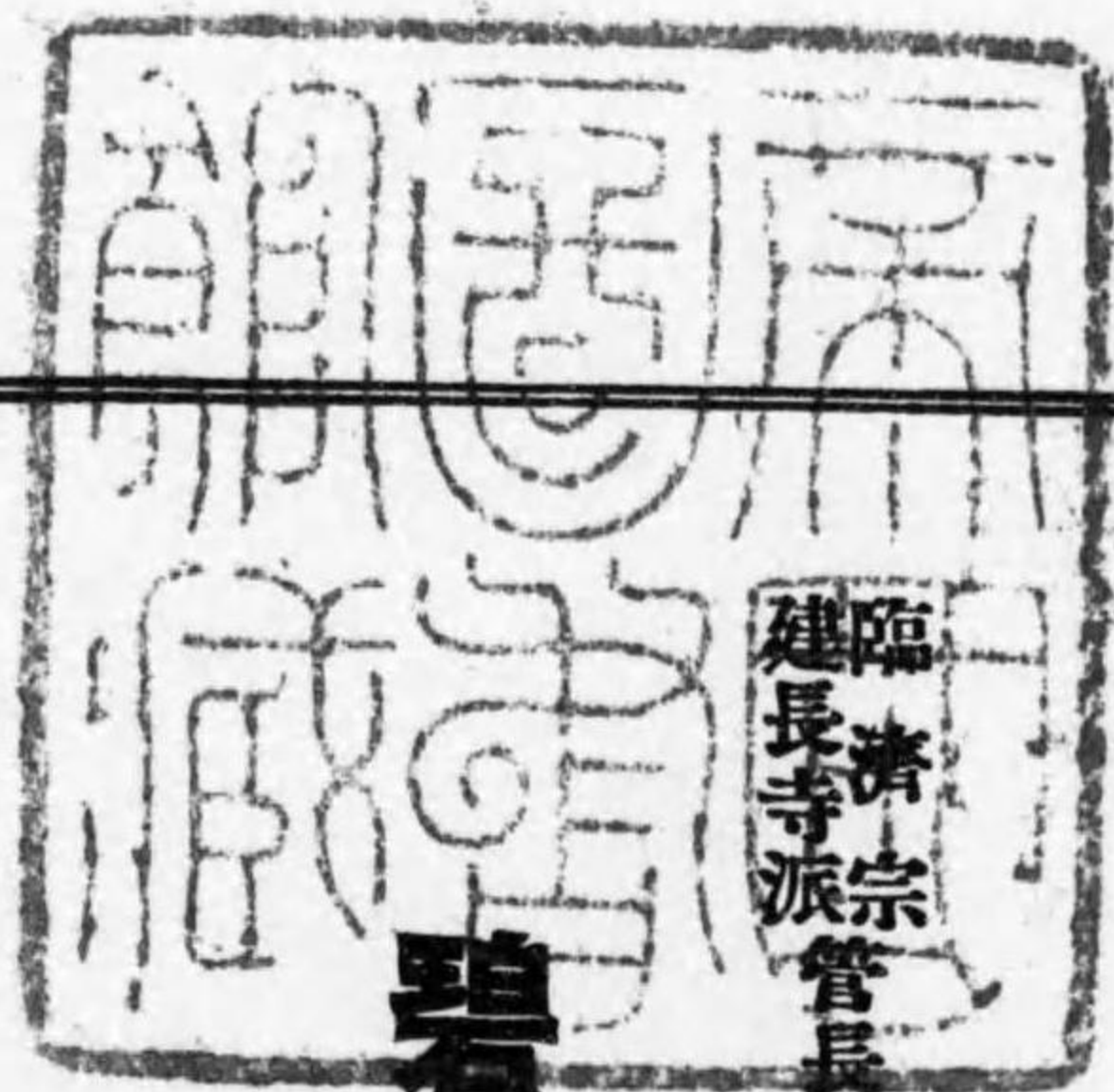
菅原時保禪師

碧巖錄講演 (其二)

始



特258
738



菅原時保禪師

巖錄講演

(其二)



碧巖錄講演の前提

(三)

今日も又、拙劣なる私が、賢明なる諸君のお耳を拜借致します。先回のつゞき、東門を除いて、西門。南門。北門。につき例の臭口を開きます。

古書に梅檀を切れば寸々是香、昆山を掘れば片々是玉とあります。(唯だ意味を採りましたので文字の配合は或は不是かも知れませんが)諸君御承知の如く梅檀香木は徹頭徹尾香木であり、故に如何に細末に致しましても其香氣は依然として馥郁であります。—— 昆山も亦然り。山其もの全部が玉の結晶であ

ります。故に何れの處を掘りましても明玉ならざるなしであります。敢て梅檀香木や昆山明玉のみに限りません。人も亦復然りであります。所謂、長者は長法身、短者は短法身。——人々此まが佛の全體にして神の全體、——神の全體そのまが佛の全體、——それそれが、そのま、真理の全體、大道の面目であります。——殊に日本人は忠の結晶、孝の權化であります。試みに日本人を膾の如く細く切りきざみましても依然として忠孝そのものは充實圓滿して居ります。曰く毛の數、八萬四千、其一本一本、——曰く骨の數、三百六十、其一片一片、それが悉く、それが總て忠であり孝である。——故に私は云

ふ忠孝を除いて日本人そのものあることなし、こ。——

隨がつて日本人の生存して居ります天地日月は無論のここと山川草木に至る迄、是忠、是孝、——忠孝の外に天地日月なし山川草木なし。——忠は日本國の大なる生命にして孝は日本國の大なる骨肉であります。——或古人は忠ならんご欲すれば孝ならず、孝ならんご欲すれば忠ならずご忠孝の兩面に迷うて悲泣なされましたが、それは支那の忠孝を知つて日本の忠孝其ものを知らざるが然らしむるのであります。忠孝の文字、それは支那製でも忠孝の實體は日本製であります。日本では忠の外に孝なし、孝の外に忠なし、親に對する孝が即ち君に對

する忠、君に對する忠が即ち親に對する孝、忠孝一體、不二忠孝、——忠と云ひ孝と云ひ其本體は蓋し一心であります。之は一心が國の地盤となり、家の柱石となる。家の柱石となり國の地盤となる其心に修養を重ね、其心に練磨を加へ、忠をして愈々純忠に、孝をして益々純孝たらしむる、その手段方策の最上乘なるものが禪それであります。豫て諸君の知らるる如く、禪は心の修養、心の練磨、それが禪の本領にして禪の面目であります。

故に先回、心を中心として假りに東西南北の門戸を設け、修行の様子を申し上げました。既に東門の説明は終了致しました

から今日は西門の説明をさせて頂きます。

西門、——西門とは方位を借りて申したのであります。是を帝王の門に比しますれば朱雀門、修養の方面から命名致しますれば修行門、經意からは平等性智と稱します。私は呼んで無字門と云ひます。抑々此無字門は、南泉山の住僧普願禪師の法嗣、趙州城外觀音寺に大法を擧揚して居られた從諗禪師の建立であります。茲に一寸趙州禪師の略歴を申し上げるも敢て無用どころか寧ろ一興であらうと思ひます。

趙州禪師は八十歳にして始めて行脚なされたごあります。(日本では六十の手習と云うて老人の事業を笑ひますが、西洋人は

五十六十は鼻たらし、人間の盛りは七八十と云うて居ります。趙州禪師の如きは、道に古今なし修養豈に老少あらんや、と云ふ處に心を置き眼中に老少を認めず專一に大道そのものに着目し眞一文字に邁進なさるお人でありました。老ひて益々健強、窮して轉々勇行であります。然るに當今薄志弱行の日本人（全部ではありません）、五十歳か六十歳になると隠居をして老人ぶる、それを名譽の如く思うてをる腰拔がある。何たる弱虫ぞ、何たる無道心ぞ。之是等の人に趙州禪師の鼻糞でも飲ましたら少しは氣がつくかも知れません。諸君知らずや、日本の今日は、實際の非常時、老若男女を論ぜず、苟も日本國に籍を措く者は、甲も乙

も、大も小も一律一體に國を護らざる可からず、敵を防がざる可からず、然るに我關せず焉と樂隱居することは。——「趙州禪師は大悟徹底してより二十年間、更に自己の修養に辛苦されました。所謂、行ひ餘力あつて文を學ぶと云ふ筆法で、自己修養の後、一切衆生濟渡の爲に和泥合水、東說西話、南船北馬、菩薩の下化三昧四十年、百二十歳にて遷化なされました。趙州禪師は常に實行なされし其一事、三歳の童子と雖ごも我に勝らば以て我が師となすべし、八十の老人と雖ごも我に劣らば行ひて教ゆべし、是を完全におやりなされた。此一事を以て趙州禪師の凡人に非ざることが知れます。諸君お互は趙州禪師の禪を

のもの、大小、輕重を忖度するここは暫く措き、三歳の童子、雖も我に勝らば以て我が師となし、八十の老人、雖も我に劣らば行ひて教ゆ、云ふ之是上求菩提、下化衆生の端的は是非も我がものになしたきものであります。——閑話休題。——

一日僧あり趙州禪師に問うて曰く、狗子に還つて佛性ありや又なしや。——趙州曰く無。——僧曰く、上諸佛より下

螻蟻に至るまで悉く佛性あり。然るに甚麼して却つて狗子に佛性無なるや。(之是等の人を稱して文字言句に執着する愚劣漢云ふ、今日とても是に類する人甚だ多しであります。)趙州曰く、伊に業識性のあるが爲なり。」趙州の老婆親切、却つて人をして

迷宮に入らしむ。寧ろ徳山禪師の如く三十棒を與へたなら或は無明の夢が破れたであらう。殘念殘念。されど、趙州禪師は唇皮を以て禪を舉揚なさるが家風でありますから、趙州禪師は趙州禪師の立場でなさるここ私共が彼れ是れ茶々を入れるは禪師に對しても法に對しても大なる不敬であるかも知れぬ、故に飲んで速退致します。

趙州禪師の大獅子吼なされた一箇の無字、其重きを云はゞ須彌山より重く、其堅きを語らば金剛石より堅し、苦きここは黃連よりも苦く、而して甘きここは甘草より甘し、總ての色、總ての聲、總ての香、總ての味、總ての觸、總ての有形、——

總ての無形、——一切を備へざるなく、一切を具せざるなし、
可謂無物堪比倫、教我如何説、——サア諸君、之は無字、
——何ご云ふたらの的中するか、如何にしたら我ものになるか、
サア、諸君、——サア諸君、——

無門禪師、無字を頌して曰く

狗子佛性 全提正令 纔涉有無 喪身失命

古徳の曰く

趙州狗子無佛性 萬疊青山隱古鏡

赤脚波斯入大唐 八臂那吒行正令

又曰く

趙州露刃劍 寒霜光焰々 若擬問如何 分身爲兩斷

又曰く

無無無無無 無無無無無 無無無無無 無無無無無

此無字門より入得せし人、古往今來枚舉に違あらず、諸君若
し此門より入らんご欲せば、誓つて有無の念を起す勿れ、通身
一箇の無字になりきることを要す。果して打成一片ごなり得ば、
驀然打發、天を驚かし地を動かし大機大用の好時節到來するこ
ご疑ふべからず。

趙州禪師常に衆に示して曰く、眞箇一則の話頭に實參するこ
ご三二十年にして大悟徹底し能はざれば、速に老僧が首を切り

持ち去れ、こ。眞に然り眞に然りであります。——蓋し悟不悟、徹不徹は他に非ず、人々の參窮如何にあるのみであります。故に諸君勉旃勉旃。

以上東西の二門、是を以下の二門に對するときは、一方は無形を主として有形を伴ひ、一方は有形を表して無形を裏となすが如くに似たれども、其實決して然らず。學者の意志不同にして希望も亦一樣ならず、故に隨縁赴感の教化より隨類覺得の解脱者に對し一時の方便、——要は有形無形、打して一團となすにあり。——一團となしたる時、是を燒甄打著連底氷 卷盡五千四十八、又は十方世界一團鐵 虎頭虎尾一時收

と云ふ。——而して後、——説いて八萬四千の法門となすとも、拈じて一千七百則の公案となすとも、亦是朝三暮四、亦是前三々後三々、亦是醍醐、亦是毒藥、出すに任せ擧するに隨がひ、——一として不可あることなし。常に云ふ咳唾掉臂も祖師西來意底の端的であります。——諸君誤つて文字の葛藤、有形無形の幻影に轉却せらるゝことなく、水乳相合鵝王喫乳、と云ふ、諸君鵝王となり其乳を喫して其水を喫する勿れ。是より南門に向つて更に臭口を弄しませう。

南門、南門とは方位を借りての假名、帝王の門とすれば白虎、修養の方面から云へば菩提、經意よりすれば妙觀察智、今は俱

臆の一指門と命名致します。

此俱臆禪師は天龍禪師の法嗣にして、金華山に住せし人、本名を呼ばずして俱臆々々人と呼び自分も唱へて居られました。常に佛母陀羅尼を讀誦するが故にご本にはあります。俱臆住山の時、一尼あり實際と稱す、一日來り笠子を脱せず錫を揮つて俱臆を遶ること三回、(何たる無禮ぞ狂人か將亦痴人か、痴人に非ず狂人に非ず、所謂禪病に罹りし一種の變体心理者ならん、可謂雲居の羅漢と)直立して曰く道得ば笠子を下さん、ご。如是三問、俱臆對なし。(俱臆禪師元より愚に非ず、既に金華山に住す。蓋し相應の智者たるべし。然るに恁麼の三問に逢着して一

言半句の應酬なきは、思ふに此一大事に於て修養淺薄なるがためならん。)尼便ち去る。——俱臆曰く日勢稍々晩る、何ぞ一宿せざるや。好言語、好消息、只恨むらくは遅きこと八刻。——

尼曰く道得は一宿せん。此尼鼻孔遼天、去れご再來半文錢に當らず。俱臆又對なし。尼去つて後、歎じて曰く、我、大丈夫の形を具すと雖ごも、我に大丈夫の氣慨なし、——我に大丈夫の素質なし、——我に大丈夫の藝能なし、——我に大丈夫の心膽なし、——如かじ山を捨つるご共に一切の粉色を放下し、

一意専心諸方に往き總ての大善智識を訪問し參禪辨道せざるべからず、ご大願心を起し(大丈夫の威氣茲に驀發す、可仰可敬、

亦以て後世僞丈夫者の好模範、——一山大衆の熟睡を計り終夜發足の支度に忙殺され、僅かに坐睡を打しぬ。時に金華山の山神夢に入り告げて曰く此地を去ること勿れ。近日肉身の大菩薩來りて汝が爲に說法せん。——句を逾へずして果して天龍禪師來山せり。(天龍禪師は大梅禪師の嗣法者なり。)俱胝迎請し僧尼に勘破せられし醜態を一々陳述して指導を求む。(聽くは一時の愧、聽かざるは末代の羞)茲に於て天龍禪師多端に渡らず唯一指を豎て是を示す。(此一指、——釋迦の拈華と異曲同工、——相識滿天下、知心能幾人)俱胝當下に大悟。試みに諸君に問ふ此何をか悟る。勿謂、天地一馬萬物一指、こ。中に風露

の香あり、知る人ぞ知るこ云うて措きませう。——

俱胝、天龍禪師の一指を掌握してより以後、一切の學者、總ての問者、それに對して唯一指を擧するのみ更に多端に渡らず簡單明白。——

古徳曰く一處透れば千處萬處一時に透り、一機明かなれば千機萬機一時に明かる、こ、眞に然りであります。俱胝、その人始めは處女の如く、然るに大悟して以後急變して脱兎となりて活轉靈動せらるゝ所以は蓋し動不動の處に向つて動じ、轉不轉の處に向つて轉ぜられし其賜であります。——俱胝門下に一童子あり常に人の問ふ毎に必ず一指を豎て祇對す。(勸學院の雀は

蒙求を語る、門前の小僧は習はぬ經を讀む、こ。之是小僧もそれらの類ならん。故に人は須らく居處を撰ばざるべからず。人あり一日俱胝に問うて曰く彼の童子も亦佛法を會するや。俱胝一日潜に刀子を袖にして童子に問うて曰く聞く汝佛法を會すこ是なりや。童子曰く是。俱胝曰く如何是佛法。童子指頭を豎起す。俱胝刀を以て其指を斷つ。童子叫喚して走出す。俱胝童子を召す。童子首を回らす。俱胝曰く如何是佛法。(茲が俱胝の活作略、此活作略を先の尼僧に使用し去らば尼僧必ず大歡喜し來るならん。賊後の弓残念残念。さりながら恁麼の活作略は此一大事を體得したる人に非ざればなし能はず。)童子手を舉して指頭を見

ず。茲に於て豁然大悟せり。三尺の童子既に大悟、五尺の大人、大悟せざれば此童子に對して何の顔かある。大悟する能はざれば寧ろ慚死すべし。

俱胝、順世に臨み衆に謂ひて曰く、我れ天龍禪師一指頭の禪を得て一生受用不盡、と言ひ終つて滅す、こあります。古句に「一得永得」こ云ふこことがあります。蓋し恁麼の境界を洞觀しての語ならんこ私は思ひます。

諸君若し此俱胝禪師の一指頭門より入らんと欲せば、諸君の入るに任せます。要は、「巨靈抬手無多子、分破華山千萬重、」之是の語を心頭にかざし、暫時も失却してはなりません。果して

然らば桃栗三年、柿八年、因縁時節到來、必ず大悟徹底、古の俱胝が今の我れ、今の我れが古の俱胝、古今一貫、彼此一體の大俱胝を活現することが出来ます。

次は北門、方位上より北門と云ふのであります。帝王の門とすれば青龍、修養の方面からは涅槃門と稱し、經意からは成所作智門と云ひます。今は是を白隱禪師の隻手門と呼びます。無論日本製、東海道原驛の松蔭寺に住居なされた通稱白隱、神機獨妙禪師の創立であります。隻手とは讀んで字の如く、隻手、——兩方の手ではありません。兩方の手を左右同時に相撃しますれば聲を發します。されど格別不可思議の聲は出ません。

然るに隻手には甚深微妙の聲があります。(之は隻手無聲の妙音は如何にして聞くべきや、云ふまでもなく心の耳で聞かざるべからず、其心の耳は大死一番せざれば具すと雖も用をなしません。)隻手の開祖白隱禪師は世間稱して五百年間不出の名僧と賞讃し、百年以後の今日益々其著書を尊敬し、其筆跡を愛翫すること非常であります。「禪師は多年苦辛修養既に法の淵源に達し、更に信州飯山正受老人に參禪、其精勵尋常ならず終に其衣鉢を傳受し禪門中興の法將と云はれました。禪師の門下濟々多士、就中、隱山、卓州、東嶺、峩山、遂翁等の所謂一騎當千の名師を打出なさる。——禪師常に豪語して曰く日本に過ぎた者が二

つある諸君試みに承當し來れ、こ。——敢て人の承當するなし。——故に自ら代つて曰く駿河の富士に原の白隠。——

如何にも禪師の云はるゝ如く富士は三國一と昔より傳聞して居ります。日本に過ぎたこと云うても或は不可なからん。併し白隠に至つては世間知る人少なし。僅かに禪家者流の一派が知るのみ。然るに傍若無人に雲居の羅漢を振舞して敢て人の是を誹議するなきは、禪師の道德、其高きこと知るべしであります。

——聞く白隠禪師に先だつて日蓮上人、大口を開いて曰く我は日本の柱なり、我は日本の眼なり、我は日本の舟なり、こ。

——蓋し豪語の點に至ては白隠と日蓮、難兄難弟であります。

す。』如是兩人とも大言壯語して憚らざる所以は、無論兩人とも胸中に大なる確信が存在してをるのであります。諸君お互が大なる確信を胸裏に藏し、白隠、日蓮をして倒退三千里ならしめようではありませんか。——

苟も大なる確信を得ようと思は、先以て此の隻手門を透過すべし。此の隻手門を透過せざれば、如何に才智があり、如何に學力があり、如何に金錢があり、如何に位官がありと雖も、總てが砂上の樓閣、一切が空中の殿堂。——一朝大なる暴風雨に逢着し來らば、粉飛塵散、——木葉微塵、——瓦解氷消。

——故に非常時の今日切に望む、諸君進んで、隻手門を透過せ、

ざるべからず、——勇んで、隻手門を粉碎せざるべからず、——願うて、隻手門を、踢倒せざるべからず、——云ふこと勿れ、白隠の隻手の聲を聞くよりも、双手を打つて商賣をせよ、こ。迷ふこと勿れ、疑ふこと勿れ。白隠も人なり、日蓮も人なり、我も又人なり、彼れ既に大悟して大活動をなせり、我も又大悟して大活動をなさざるべからず、こ奮起致せよ奮起なさざるべからず、共に俱に大奮起致しませう。——此隻手門より入得し、大自由、大自在、大解脱、大活動、それを以て天下國家の爲に至誠の忠を盡し、至誠の孝を捧げし人、枚擧するに算なしであります。入門底、畢竟如何。曰く隻手音聲。——隻手音聲、——

唯之是耳。——

白隠禪師、學者に示されし偈に曰く

山下有流水、滾々無止時、禪心若如是、見性豈其遲」

嗚呼水なるかな、水なるかな、水は晝夜の差別なく、次第を逐ひ順序を守り、それからそれ、それからそれ、終に大海に入る。——古歌に

行末は海なるべき谷川も

しばし木の葉の下くゞるらん」

ごあります。修養者の取つて以て座右の銘となすべきであります。以上是にて東西南北の四門、其略説終了であります。今日は

是で失敬致します。久立珍重。

(以上昭和十一年四月十一日講演)

(四)

碧巖録講演の前提、俗に云ふ地ならし、地がためは、本日で打切りに致します。

今年は、諸君の知らるゝ如く例年になき炎天つゞきで、お互は無論のこゝ、特に農村は農作物のために非常に心痛してをりました。ところが、天道人を殺さずで、幸なるかな今日は一滴千金の雨が多量に降りました。——里語に「雨降つて地かたまる」云ふこゝがあります。本日で打切に致します碧巖録の地盤も此の雨の爲に一層堅固になるこゝ、私は悦ぶ次第であり

ます。

經書の中に、天下の道は、仁と不仁とのみ、と孔子様が云はれた様に記憶して居ります。其仁、不仁、を云ひ換へますれば善と不善とであります。

元來、人の歩行する道は、多種多様、多端多類であります。要するに、曰く仁、曰く不仁、仁の善道と、不仁の不善道より外に道はありません。

仁の善道を歩行せざる人は不仁の不善道、——不仁の不善道を歩行せざる人は仁の善道、——仁の善道を歩行なさるお人を、神様、佛様、又は聖人賢人と申します。不仁の不善道を

歩行なさるお方を、悪魔、外道、又は人非人と云ふのであります。

お互は勤めて仁の善道を歩行し、誓つて不仁の不善道を歩行せず、佛にならずとも、神にならずとも、聖人賢人にならずとも、共に俱に眞箇の善人、確實の仁者になりたきものであります。否、進んで善人、仁者になりませう。

三世諸佛の通戒に、「諸悪莫作 衆善奉行 自淨其意 是諸佛教」ご云ふ偈があります。序でありますから、御参考までに道林禪師と白樂天の問答を、お耳に入れて置きませう。

年代は失念致しました。唐代の文豪、白樂天、此人支那杭州

の知事、所謂、良二千石、に赴任なされた時、州内で有名な道林禪師を一日訪問なされました。」此道林禪師は暇さへあれば、庭内の松樹、その枝と枝と三叉になつて居る其上に坐布團をしき坐禪三昧に入つてをられますから、世間の人が、如何にも鳥が窠の中にをる様に見ゆる處から、誰云ふごなしに、道林禪師のここを鳥窠和尚と綽名をつけました。白樂天の訪問なされた其時も、例に依つて古松の上に坐禪して居られました。白樂天、其様子を一見するや思はず「險なる哉、險なる哉、」あゝ危い危いご叫びました。するご樹間から其聲に應じて「險なる哉、險なる哉、」あゝ危い危いご、同じごを叫ばれたから、驚いたのは白

樂天。——白樂天曰く、「弟子、一州の鎮たり、而して今や大地に立つ、何の險なるごか是あらん。」云ひ換へますれば、私は苟も一州の知事であります。故に一州の事は大小ごなく一切心のまゝになります、すごしも危いごはありません。——禪師曰く、「薪火相交る識性不停なり、豈に險ならざるを得んや。」山ご積んだ薪も、一度び火を點すれば、忽ち灰ごなつてしまふ。吾人は如何に健康を誇つても一旦無常の風に誘はれたならば、忽ち灰ごや。今、尊公は、一州の太守ごして權威赫々たるものであるが、若し無常の大敵が俄かに押し寄せたごしたら、ごうである、決して危くないご云ふ御準備が出来て居りますか、

敢て無常の大敵と云うても死ぬこのみではありません。一朝尊公の上官が他に轉任すれば、尊公の今の大座も或は根本より顛覆しないとは限りませんぞ。—— 險なる哉、險、危くないと確信が出来ますか。—— 茲に於て、白樂天も、天然の愚物ではありませんから自ら省みて、未だ安心の境界に到達してをらざることに気がつき、其安心を得るが爲に、更に「如何なるか是れ佛法の大意、」と改めて質問に及びました。—— すると禪師曰く、「諸惡莫作 衆善奉行。」—— 悪い事は一切止めて、多くの善い事をする、それが佛法の大意であり、それが佛法の心髓であり、それが仁義道德の本領である。—— 白樂天は因習

深き我執が、例によつて首をもたげ曰く、「三歳の孩兒も亦、慙に云ふことを解す。」それ位のことは三つになる子供でも云ふことを知つてをります。—— 禪師曰く「三歳の孩兒も云ひ得る、雖も、八十の老翁も之を行ふこと難し。」云ふことは出来るが、實行は容易でないぞ。—— 茲に於て白樂天、愈々我見の角を折り眞に感服、師資の禮を取つて親しく辨道なされた、ごあります。—— 辨道の目標は、諸惡莫作、衆善奉行の次の句にあります。自淨其意であります。

諸君、考一考して御覽なさい。自己の本心本性が眞箇清淨でなければ、眞箇の善、不善が明瞭になりません。其本心本性を

眞箇清淨にする、方便、手段、作法、それを坐禪と云ふ。坐禪三昧に入り事實に自己本來の面目を覺了すれば、行も亦禪、坐も亦禪、語黙動靜體安然で、心の欲する處に隨がつて總てが善、悉くが仁、而してそれが眞理、それが大道であります。——
 恁麼の聖地に到達しようと思はゞ、先づ以て四弘の誓願に鞭うたざるべからず。

四弘の誓願とは曰く、

衆生無邊誓願度 煩惱無盡誓願斷

法門無量誓願學 佛道無上誓願成」

是を三世諸佛の通願と申します。苟も佛と名のついた佛様は、

其大小、其古今を問はず、一律一體に御使用なさるゝ願文であります。隨がつて祖師と云ふ祖師、何宗何派を論ぜず、諸佛と同様に實行なさるゝのであります。故に諸佛の流を汲み、諸祖の兒孫たる者は老若男女、智愚賢不肖の別なく、無條件に四弘の誓願を守るゝ共に實踐躬行せざる者は、獅子身中の虫、佛祖を衣食の資料にする大罪人、大惡人、大惡魔、大外道であります。』正法千年、像法千年、末法萬年、只今は末法萬年の五濁惡世、——故に身に獅子皮を被して口に野干鳴をなし、口に經、陀羅尼を唱へて身に夜叉、羅刹の邪行を無遠慮に競ひ且つ争うて居る、それぞれが枚舉に遑あらざる程、無量無數であります。

(無論私も其一人であります。)若し過去の佛祖が、現今の佛教界の此のあり様を一見なされたなら、必ず長大息して、左の如く云はるゝこと、思ひます。

如何に末世に云ひながら斯く迄、事實に末世の面目を露堂々、赤裸々に展開しようとは未だ曾て夢にも思はざりき。

孔子様は、後世恐るべしと云はれました。それは、蓋し佛教界今日の現成底を豫言なされたものかも知れません。果して然らば、孔子様に今日の佛教界を、お見せ申しましたら胸を叩いて慟哭なさるゝことでありませう。

子にして親を泣かすは、親に對して不孝者、弟子にして師匠を苦しむるは、師匠に對して不忠者、佛祖の子孫、佛祖の信者にして、佛祖を泣かし佛祖を苦しむるは、佛祖に對して大なる不孝者、——佛祖に對して大なる不忠者であります。

さらば如何にして可ならん乎。他なし、佛祖の心を苦しめず、佛祖の意を安んずるにあり。それには、前に申し上げた三世諸佛の通願たる、四弘の大誓願を事實に躬行する、それが佛恩、祖恩に奉答する第一義であります。極めて簡単に、四弘誓願の一句一句につき説明を下し諸君の御参考に供しませう。

初の「衆生無邊誓願度」、衆生無邊と申すことは、一切の群生、云ひ換へれば娑婆に生存して居る、總ての動物、動物中の高等動

物の人間と併せて下等動物、及び五礫土塊に至るまで、悉く慈悲の手を以て救済すべしと堅く誓ひ深く願ふ、それが衆生無邊誓願度であります。」然るに多くの人は、人様より我れ様で、自利、自濟、自救を專一にして、利他、濟他、救他を次の次の更に其次になさる。——假りにも佛祖の信者となり、佛祖の兒孫となり、佛祖の衣鉢を傳へしものは、自己自身は、無間地獄に墮落するに雖ごも、先づ以て迷途の衆生を救済せざるべからず、是非ごも救助すべきであります。それには、自己自身が一切の迷雲を拂ひ、悟りの眼と悟りの力を具備せざれば、一盲衆盲を引くで、人を救済せずして却つて自己自身が救済さるゝこと

になります。故に先決問題は、迷途の群生を救済する其基礎、——苦界の亡者を濟度する其準備、——それらのために、萬事を抛ち、一切を放外し、自己の悪煩惱を拂ひ、自己の粕妄想を除き、淨裸々、赤洒々にならざるべからず。然らざれば他を如何ごもなす能はず。依て第二の「煩惱無盡誓願斷、」是が必用中の大必用、是が充分お手にはひつて居らなければ、萬事休すで、何事も出来ません。是を事實に躬行するには、蓋し尋常一様では成功致しません。看よ、瑞巖禪師の如きは、煩惱を斷除する一種の方便ごして、毎日石上に端坐し、自ら主人公ご喚び、自らハインご答へ、「無業禪師の如きは、修行の一階

段として常に莫妄想、莫妄想、自己自身で切瑳琢磨なされまじた。——必ずしも古徳の芳躅を固守することを以て是なりと認識するものではありません。されど、條あれば條に依る敢て不可なしでありますから、古徳の先例を學ぶべし。——古人の好規に隨ふべし。——隨がつて煩惱を雲散すべし。學んで妄想を霧消すべし。口では煩惱即菩提、生死即涅槃、ご豪語致しますものゝ、眞箇に煩惱をして即菩提に、事實に生死をして即涅槃に、なし得ることは、普通一般の修行では、ごてもく／＼であります。第三の「法門無量誓願學」、第四の「佛道無上誓願成」、學ぶべき法門は無量、成すべき佛道は無上、無上の佛道を成就

せんご欲するならば、是非ごも無量の法門を學ばざるべからず。「然るに無量の法門を學ばずして無上の佛道を成就せんご欲す、それは無理、それは非道、——無理、非道は自己に於て既に不安、況や人をして安心を得せしむるに於てをや無理更に無理、非道更に非道であります。」故に先づ以て無盡の煩惱を斷除し、無量の法門を學び、無上の佛道を成じ、自分も人も、自身も他人も、共に俱に大安樂の境界に到達するこそ、一蓮託生にして共に成佛であります。

左に古徳の坐禪により無盡の煩惱を一刀兩斷なされた範例を一二お耳に達しませう。

曾て申し上げました如く、坐禪修行の定義、坐禪修行の要目、坐禪修行の法則、坐禪修行の心得は、簡單、眞劍、徹底の三であります。敢て坐禪修行に限りません。人間萬事總て然りでありますが、特に坐禪修行に於ては以上の三を事實に躬行しなければ勞あつて功なしであります。

簡單、こは、讀んで字の如く、多端に渡らず、迂遠に流れず、單純に無字なら無、隻手なら隻手、それごとくそれで、よろしい。

眞劍、こは、是も讀んで字の如く、木劍でなし、竹刀でなし、夏尙ほ寒き、玉ちる眞劍、それを互ひに振りかざし、彼を殺すか、我が殺さるか、此間、寸毫も餘念を用ひず、寸時も傍目をふ

らず、一心不亂、一生懸命、公案そのものごと、自己そのものごと、一上一下、虚々實々、全力を盡して大決戦する、それが眞劍の一例であります。

次の徹底、是又讀んで字の如く、十のものなら十全部、百のものなら百悉皆、一箇半箇も残さず、俗に云ふ毒を喰らは、皿まで、ねこんずく、こ云ふ意義、それであります。

古徳の古徳として尊敬さるゝ所以は、何れも簡單、眞劍、徹底の三則を事實に躬行なされたからであります。北條時宗と大なる関係のある圓覺寺の開山、無學禪師は、趙州禪師の發明にかゝる一箇の無字關に依り、眞理の根源、大道の妙處、本具の

佛性、本來の面目を大悟なされた其時吟出なされた投機の偈に

一、槌、擊、碎、精、靈、窟、突、出、那、吒、鐵、面、皮、
雙、耳、如、聾、口、如、啞、等、閑、觸、着、火、星、飛、

禪宗一派では是を投機の偈と云うて居ります。機は得がたし
失ひ易しで、時機、時節、時運と云ふものは、決して彼より來
るものに非ず、必ず我より發見すべきもの、幸に發見しても是
を把握する手腕がなければ徒らに隣の寶を數ふるのみ。昔も今
も徒らに隣の寶を數ふる人の多きを如何せん。——處が無學
禪師の如きは隣の寶を數ふるに非ずして、事實自己固有の寶を
發見なさるゝ共に把握なされたのであります。

起承の二句、「一槌擊碎精靈窟 突出那吒鐵面皮」

無字三昧の鐵槌を眞向にかざし、玄翁和尚が那須野が原の殺
生石を擊碎なされし如く、自己の精靈窟を木葉微塵に擊碎せら
れた。——玄翁和尚の擊碎せられた殺生石からは白煙が、も
うくこ出ました。「無學禪師の擊碎せられた精靈窟からは那吒
の鐵面が、によき、によきこ出ました。」太田道灌は

昨日まで莫妄想を入れ置きし

へんなし袋いま破れけり」

と云うて、切りし腹を人に見せたさあります。「太田道灌は、
太田道灌として賞すべき處があり、玄翁和尚は玄翁和尚として

是又味ふべき處がある。

無學禪師の擊碎なされた精靈窟から那吒の鐵面皮が飛び出したと云ふが、それは、抑々如何なるもの乎。——男か女か、神か佛か、鬼か蛇か、火か水か、——水でもなし火でもなし、鬼でも蛇でも、神でも佛でも、男でも女でもなし。所謂、仁者は是を仁と云ひ、智者は是を智と云ふ。——鶏寒うして、樹に登り、鴨寒うして水に入る。——

「心ある人に見せはや津の國の

なにはあたりの春のけしきを」

「本來の面目坊の立ち姿

一目見しより戀となりぬる」

美如西施離金闕、嬌似楊妃倚玉樓」を評するも敢て當らず

ではありますまい。

轉結の二句、「雙耳似聾口如啞 等閑觸着火星飛」

是は默識心通、——冷、暖、自、知、——無學禪師の特有、——

無學禪師の聖境、——佛、祖、を、雖、も、察、知、す、る、能、は、ず、鬼、神、を、

雖、も、忖、度、す、る、能、は、ず。

砂糖の甘きは、砂糖を食した其人にして能く知り、唐辛の辛きは唐辛を喫した其人にして能く知る。未だ砂糖の甘味を知らざる人、未だ唐辛の辛味を知らざる人、其の人に向つて砂糖の説明、唐辛の講釋は無駄ごとであります。——苟も砂糖の甘

味を知らんご欲せば進んで砂糖を喰ふべし。唐辛の辛味を覺らんご思はゞ勤めて唐辛を喫すべし。眞理の甘味、大道の辛味、悟りの境界も亦復同じ道理であります。見たり聞いたり、した、だけでは、夢に牡丹餅で、少しも腹はふくれません。風をひく位が關の山であります。

無門禪師は太鼓の音を聞いて大悟なされました。投機の偈に

青天白日一聲雷、大地群生眼豁開、

萬象森羅齊稽首、須彌踔跳舞三臺、

太鼓の音を雷聲に比しての起句、故に青天白日とあります。

ドーンと云ふ太鼓の一聲、其雷下に於て過去無量劫の迷夢、惑

夢、妄夢の總てが一時に破れました、覺醒しました。——次

の句は、大悟した曉は、自己自身が豁開するのみに非ず、大地の群生も併せて眼豁開で、誰も彼も悉く悟つた悟つた。例せば、

釋迦如來が、臘月八日曉天の明星を徹見して大悟なされた其時

奇哉奇哉、一切衆生悉く如來の智惠徳相を具す、と云はれし、

それと異曲同工であります。

お互も、敢て太鼓の音に限りません。鐘の音でも、犬の聲で

も、鳥の聲でも、又は柳の緑でも、花の紅あでも、一見一聞し

て、大悟徹底致したきものであります。古人に蛙の鳴聲を聞いて

悟つたお方があります。其詩は

頭、戴、青、苔、咄、々、鳴、千、山、虛、寂、月、初、明、
一、機、頓、發、空、諸、有、大、雅、松、風、無、此、聲、

又、雪の霏々たる聲に和して大悟なされた詩に

耳、中、消、息、意、中、觀、一、片、飛、來、一、片、寒、
及、到、返、聞、聞、自、性、蕭、々、又、是、滿、長、安、

餘談は略して、無門禪師の偈の轉句、「萬象森羅云々」、是も釋迦如來が、三界は我が有なり其中の衆生は皆我が子なり、と云はれた、それと難兄難弟であります。「古句に大道元無國境、修養豈有老少」とありますが、如何にも如何にも、悟れば先聖後聖、其揆一なりであります。結句の、「須彌踔跳云々」に至つては、

無門禪師にして始めて云ひ得ること共に事實になし得ること、未悟底の私なぞが、管見を以て聖胎を彼れ是れと忖度することは遠慮すべきことであります。故に無門禪師の偈についての説明は以上で終了に致し、爾餘は、諸君の御賢察に一任致します。

以上お耳に入れました兩禪師は、出家であり、禪學の専門家であるから、大悟も出来るであらうし、見性も出来るであらう、我等如きは禪専門家でもなければ又出家でもない、故に見性なぞは、大悟なぞは、到底及びもなきこと、と思ふお方も多くのお人の中には絶無でありますまいから、更に在俗のお方で、出家以上、専門家以上に、見性も大悟も、なされたお人を左に、

お引合せ致しませう。

姓は張、名は拙、秀才と尊稱されし人、此人支那有数の大學者にして更に禪を學び、而して禪の堂奥に到達なされました。

故に禪そのものゝ立脚地より一詩を吟出して後學初入の人に示されました。其詩に

光明寂照遍河砂、凡聖含靈共我家、
一念不生全體現、六根纔動被雲遮、
斷除煩惱重增病、趣向真如亦是邪、
隨順世緣無罣礙、涅槃生死等空華、

始めの二句

光明寂照遍河砂 凡聖含靈共我家

是は大悟底の當體、故に大悟なさらぬ、お人には其妙味は知れません。

次の四句

一念不生全體現 六根纔動被雲遮
斷除煩惱重增病 趣向真如亦是邪

是は禪の修行、そのものゝ心得、修行して御覽なされば實際が確信されます。

終りの二句

隨順世緣無罣礙 涅槃生死等空華

是は禪の活用、所謂、悟了同未悟、又は了事の凡夫、平生の喫茶、喫飯、總てが禪そのものになります。さうなるが當然であります。

以上の詩を極めて簡単に説明を下して見ませう。

光明寂照、光明ご申しましても日月星の光明ではありません。心性の光明であります。日月星の光明は如何に赫々たりご雖ごも覆盆の下を照さずで、物に遮ぎらるればそこで全滅、——然るに心性の光明は寂照、故に日月星の、その如く赫々たらずご雖ごも、能く一切の障害物を透して、總てを照破致します。試みに一例を舉揚して見ませう。未だ心性を大悟徹見せざる、

お互が曾て見たる物、曾て遊びたる處、曾て讀みたる本、只今、それ等の總ては目前になしご雖ごも瞑目して考一考しますすれば、山川草木の障害があらうご、歲月日子の相違があらうご、それらのここには、委細關せず、顯然明瞭であります。況や心性を了々分明に大悟徹見するに於てをや、遍河砂は當然であります。——遍河砂ご申すことは、盡十方法界ご云ふ換へ言葉であります。聞く佛世尊が說法なさる其都度、無量無數の喩へには必ず恒河の砂を例にお出しなさるご云ふことであります。御承知の如く河の砂は何物よりも無量無數であります。

昔石川五右衛門ご云ふ怪賊は、「濱の眞砂は盡きるごも、世に

盗人の種は盡きまじ、」と豪語されたが、如何にも盜賊の張本人だけあつて頗ぶる卓見、恐入る次第であります。昭和の今日、昔にいやまして石川五右衛門の豫言が事實に確證して居ります。

——三界唯心 萬法唯識、と申しますから、お互が心性を大悟徹見しますれば、自己の心性、そのものの光明、靜寂のまゝ、河の砂より多き總てを照破すること斷じて疑ひなしであります。宜べなるかな凡聖含靈共我家、と云ふこと。「聞く三界は我有なり其中衆生は皆我子なり、と。斯くなつたら愉快々々絶快でありませう。是非お互が自己の心性を大悟徹見致しませう。

次に、「一念不生全體現、」先に申し上げ置きました如く以下四

句、禪修行の心得であります。そのおつもりでお聞きください。

——一念と云ふは、可愛い——憎い——ほしい——お

い——と云ふ、それあります。かゝる念慮は何人にも胸中に生じます。それを生じさしてならぬと云ふのであります。

從來、心と云ふものは死物でありません活物であります。故に如何にしても念慮の生じない様には出来ません。原人論に、水の懸々たるが如く、火の焰々たるに似たり、とあります如く種々様々の念慮の生ずるのが、心の本質であります。一應字面の上のみを見ますると無念無想になれと云ふ様でありますが、否、然らずであります。可愛なら可愛い、一念の外に餘念を生ぜず、憎い

なら、憎いの他に邪念を生ぜず、ほしい——おしい——そのまゝ、是に別の念慮を混入せず、そのものそれ三昧になることであり、それ三昧になりきつた處に心の全體が現出致します。所謂、一念瞋恚頭戴角 此中何論是與非。處が一念になりきる事の出来ぬが凡夫の凡夫たる所以。次の句に「六根纔動被雲遮」で六根の眼耳鼻舌身意のために、心が引廻されて、妄想又妄想、執着又執着、既に迷つて居る其上に更に迷を添ふる、是等の雲霧のために眞如の明月が其面目を隠すことになる。「斷除煩惱重増病」元より本心本性は無病健全である。然るに可愛と云ふそれを煩惱と思ひ、憎いと云ふそれを煩惱と思ひ、ほし

い、おしい、と云ふそれを煩惱として、それらの一切を斷じよう、除かう、拂はうとする、それぞれが抑々病氣の上の病氣である。煩惱即菩提と云ふことを知らずして是等の煩惱病を全快させんが爲に頻りに眞如を求むるが、是又大なる迷ひである。聞くべし「趣向眞如亦是邪」と云ふことを。——「雲晴れて後の光りと思ふなよ元より空に有明の月」で眞如の明は、常に恒に明皎々。眞如の月が眞如の月を求むるは、無病健全の本心本性が無病健全を願ふは、迷へるに非ずして何ぞや、邪に非ずして何ぞや。——氷の外に水はなし、水即氷。——煩惱の外に眞如なし、煩惱即菩提。——凡夫の外に佛なし、凡夫即佛。——

されど、自己の本性本心を大悟徹見せざれば、依然として水は水、氷は氷、——煩惱は煩惱、——菩提は菩提、——凡夫は凡夫、佛は佛。——亂りに妄想狂に混入して野狐禪のお先きばらひをなさるな、法には依るべし、條には隨がふべし、而して修行の歩を進め、研究の足を運ぶべし。——

最後の二句、「隨順世縁無罣礙、涅槃生死等空華、」

一切の學問、總ての技藝、何れも實際の生活に何等かの爲にならねば、學問の爲の學問、技藝の爲の技藝で、一種の遊戲、一種の假裝、寧ろ世に於て功なく還つて有害であります。然るに禪は、心の外に學問と云ふ紅粉を塗るでなし、技藝と云ふ衣服

を飾るでなし、天然のまゝ自然のまゝの本心本性、それを、そのまゝ今日の上に横拈倒用するのであります。故に古人の所謂、處々眞、處々眞、隨處に主となり、——箇々轉處に立在す、と云ふ、それを事々物々上に於て實踐躬行する、それが眞箇の正禪であります。眞箇の正禪は世縁に隨順して決して世縁と相違したり違反したり致しません。若し萬一、萬々一、世の中の實生活に違反したり相違したりする様なことがあれば、それは、未だ正禪の堂奥に登らざるお人の夢路であります。——苟も正禪の堂奥に到達なされた御人であるならば、水に入つては水に同じく、火に入つては火に同じでなければなりません。眞箇

世縁に随順するここが出来ますれば、坐禪をなさらなくとも、禪書を御覽なさらずとも、禪の提唱をお聞きなさらずとも、それで完全の正禪者であります。完全の正禪者の前には涅槃も生死も、事實空華であります。「曾てお聞きでありませう。絶學無爲閑道人は妄想を除かず、眞を求めず、無明の實性即佛性、幻化空身即法身、——茲に到ればでなく事實茲に到るのであります。其法規、法則、其順序、手引、其お手本、其典型が即ち碧巖録であります。準備、地ならし、手ほごきは、是にて打切に致します。次は碧巖録、そのものを提講致します。

(以上昭和十一年四月二十五日講演)



昭和十二年一月十日印刷
昭和十二年一月二十日發行

發行兼
印刷者 佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所 東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終

